

ジョン・オナイアンズ

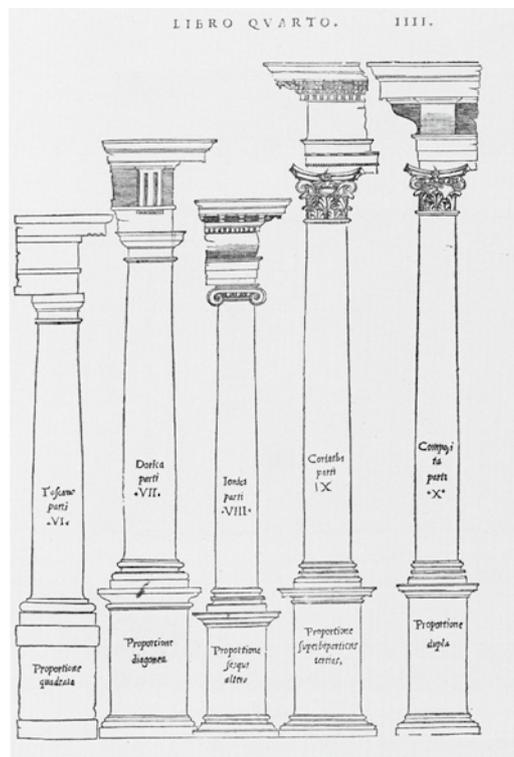
建築オーダーの意味

古代・中世・ルネサンスの古典オーダー

日高健一郎 監訳

建築オーダーは、古代ギリシャ・ローマ時代を通じて確立された建築様式の基本的な要素であり、基壇上面から軒までの形と比例を定める規範である。和書では「柱式」、あるいは単に「オーダー」と表現される場合もある。古代ギリシャ・ローマ建築の理解にとって欠くことのできない基本概念であるばかりでなく、本書が明瞭かつ詳細に示すように、西洋建築史の様式的系譜全体が立脚する基盤に他ならない。

西洋建築史の本質は、すなわち建築オーダーの歴史そのものであるといっても過言ではなく、本書は西洋建築史を学ぶ上での基本図書であると同時に、研究者にとってもきわめて有用な通史となっている。



中央公論美術出版

目次

謝辞

序

第1章 古代ギリシャ

- 行進するオーダー
- 前5-4世紀—民族に関わる意味づけ
- コリント式—新たな生命

第2章 ヘレニズム世界と共和政時代のローマ

- 異なる階級と活動 地域の伝統、地域の価値
- 共和政時代のローマ—無知から無秩序へ

第3章 ウィトルウィウス

- 最初の建築「理論」 合理的原理と建築オーダー
- デコールとデコールム 倫理的な枠組み

第4章 ローマ帝国時代

- あてはまらない理論 イタリアック・オーダー
- 自然に対する勝利 ローマ帝国遺遺

第5章 初期キリスト教

- キリストの勝利 列柱と典礼
- キリスト教の円柱

第6章 中世キリスト教の円柱

- 百科事典的な伝統—自然資産から神秘的意義へ
- イルミナルとキリスト柱
- 四角いピアと丸い円柱
- ロマネスクのピアからゴシックの円柱へ

第7章 中世キリスト教におけるオーダー

- オーダーの革新 イタリアの聖職者と平信徒
- シュバイヤー大聖堂—皇帝が足場を固めた会堂

第8章 建築の危機—中世からルネサンスへ

- 建築とキリスト教的倫理 ゴシックと古典の相克
- 生きている教会 正当化された建築
- 15世紀における美德と虚栄
- 古典を用いることの困惑

第9章 トスカーナ・ルネサンス

- ダンテとしてのブルネッレスキ
- ミケロツォ—文法規則から表現原理へ

第10章 アルベルティ

- ウィトルウィウスの遺産 フラバサスの遺産
- ラテン語、ローマ建築、イタリアック・オーダー
- 建築の倫理性 構造と装飾
- 種としてのオーダー 社会的価値と倫理的価値

第11章 フィラレーテ

- 最初の近代建築論 プラトンと黄金の書
- ギリシャ語対ラテン語 人体類比論と特質
- 建築的特質と社会階級

第12章 フランチェスコ・デイ・ ジョルジョ・マルティエーニ

- 手稿—ノートブックからテキストブックへ
- 素描の重要性 アリストテレスと科学書
- 建築オーダー

第13章 15世紀末の建築家と理論家

- アルベルティ
- ピエンツァのベルナルド・ロッセッリーノ
- ジュリアーノ・ダ・サンガッロ
- フランチェスコ・デイ・ジョルジョ

第14章 新しいキリスト教建築

- ニコラウス5世 ピウス2世
- シクストゥス4世
- シクストゥス4世の甥たち

第15章 フランチェスコ・コロンナ

- 二つの愛—性と建築
- 「リニアメント」と「プラティカ」 建築と音楽
- 「イントナツィオーネ」とオーダー
- 「メンストラート・テンポ」と柱間

第16章 ルーカ・パチョーリ

- 「神聖比例論」と目の優越性 建築
- オーダーと性格 オーダーと感情
- 建築批評と目

第17章 ブラマンテ

- 建築のポリフォニー オーダーと旋法
- ドリス式の卓越性について
- ルスティカ積みの諸旋法
- サン・ビエトロ新聖堂—宗教の歴史と建築の歴史

第18章 ラファエロ

- レオ10世への書簡
- 「署名の間」と「ヘリオドロスの間」
- 「火災の間」 建築史と宗教史、再び

第19章 セルリオ

- 画家の建築書 建築的判断 オーダー
- 自由と法則
- ルスティカ積み、ゴシック、そして古典的オーダー

第20章 セルリオのヴェネツィア

—サンソヴィーノ、アレティーノ、ティツィアーノ
そしてヴァザーリ

- サンソヴィーノとピアッツェッタ
- 市門としてのピアッツェッタ アレティーノ
- ティツィアーノ ヴァザーリ

第21章 16世紀の選択

- 地位、倫理性そして性格
- 教会建築—闘う教会か勝利の教会か?
- バラツォとヴィッラ—善良であるべきか、偉大であるべきか?
- 政府と商業—公共建築と社会的秩序
- 要塞—人々を疎外しつつ守る

あとがき
図版一覧

参考文献
索引

II あとがき II

本書は、J. Onians, “Bearers of Meaning” の全訳である。原書名の直訳は「意味を帯びているもの」となるが、訳書名には、本書の主題である「建築オーダーの意味」をそのまま充てることとした。建築オーダーは、古代ギリシャ・ローマ時代を通じて確立された建築様式の基本的な要素であり、基壇上面から軒までの形と比例を定める規範である。和書では「柱式」、あるいは単に「オーダー」と表現される場合もある。それは、単に古代ギリシャ・ローマ建築の理解にとって欠くことのできない基本概念であるばかりでなく、本書が明瞭かつ詳細に示すように、西洋建築史の様式的系譜全体が立脚する基盤に他ならない。しかも、その形と意味は時代、地域、作例でそれぞれ多様に変化するので、建築造形の理念と意味を論じる場合、まず、そこでどのような建築オーダーが用いられているかが重要な手がかりとなり、同時に論拠ともなる。この意味で、西洋建築史の本質は、すなわち建築オーダーの歴史そのものであるといっても過言ではなく、本書は西洋建築史を学ぶ上での基本図書であると同時に、研究者にとってもきわめて有用な通史となっている。

建築オーダーを基盤とする様式分析は、少なくとも19世紀、より早くは15世紀のルネサンス時代から建築文化の歴史的理解の根幹となってきたが、近年、建築オーダーを備えるべき建築のみの歴史、あるいは建築オーダーを第一義的な基準とする形式重視の様式論といった、いわば「古典的」建築史の範疇と構造にとらわれない新しい視点からの調査と研究も盛んに進められている。そうした新しい展開のなかで研究の対象と方法は多様になり、隣接分野や関連分野との融合的研究も進んでいる。特に、「西洋建築史」という概念規定そのものにも疑問が抱かれているのは当然かもしれない。「西洋」という概念がそもそも日本的であり、それがかつて規定しえた地域と文化領域は、文化交流のダイナミズムの諸相が明らかにされるなかでその意味を徐々に失いつつある。ローマ建築、ロマネスク建築、さらにルネサンス建築などの様式概念が、それらの研究の中核を担うヨーロッパ諸国の研究者にとってもすでに多義的となり、それをさらに限定する地域的、時代的な形容なしに漠然と適用することができない現状にあって、日本から見たその総体としての西洋建築史は何重もの曖昧さを免れることはできない。

概念としての西洋建築史が有効性を失いつつある状況に対し、建築オーダーの概念と系譜はなお普遍性を保ち、また保ち続けるであろう。建築オーダーは、古代はもとより、ルネサンス以降の各時代において建築思潮、建築理論の中心であり続けたので、その理解なしに建築の理論的考察を完成させることはできないからである。西洋建築史の「西洋」が何を意味するかは曖昧になったとしても、建築オーダーとは何か、建築オーダーが何を意味するかは明瞭な問いであり、系譜を示しながらその問いに答えた本書は、西洋建築史研究の根幹としての建築オーダー研究の有効性を改めて証明した記念的著作であるといえる。

18世紀のアカデミズム以降、建築オーダーに関する理解は、様式論の基本とされた。しかし、本書が示しているように、その理解は「形態」ないし「形式」を重視した教条的分類であり、各オーダーの「意味」が十分に考察、分析されることはなかった。建築オーダーに関するその後の国内外の研究では、この強固な形式論から脱皮する機会のないまま、形式としての建築オーダーの認知が古典主義建築を理解するための「常識」とされてきた。

1960 - 70年代のウィトルウィウス研究の進展、ルネサンス建築書研究の進展によって、それまで暗黙の了解とされてきた建築オーダーに関して、その「意味」を改めて問い直す試みが始まった。ア priori に与えられた建築オーダーという形式が帯びる意味への問いかけが、こうしてようやく開始されたのである。建築オーダーの意味に関する書籍の誕生はこうして必然性を得ていくのであるが、それは、建築様式史に建築オーダーが果たしてきた役割を意識するとき、相当に大きな覚悟と周到な準備、様式論を超えた建築史への深い理解を必要とする作業であったと思われる。ルネサンスからヘレニズムに及ぶ広い学識と史料の渉猟を誇る著者にして初めて、この大きな課題に答えることができたのではないだろうか。



パルテノン神殿 アテネ 前447-432年

著者略歴

ジョン・オナイアンズ(John Onians)
イースト・アングリア大学(イングランド南東部
ノーウィッチ)教授(美術史専攻)、美術史研究
所所長
1942年生まれ。ケンブリッジ大学トリニティー・
カレッジで古典学、ギリシャ・ローマ考古学を学
び、ロンドンのウォーバーク・コートールド研究
所で美術史、建築史を研究。ニューヨーク、アム
ステルダムで美術史、建築史の講座を担当、ギリ
シャ・ローマ美術、ヘレニズム美術と建築、ルネ
サンスの美術と建築に関する著作と論文多くを執
筆。本書『建築オーダーの意味 *Bearers of Meaning*』
で1989年度サー・バニスター・フレッチャー賞を
受賞。

監訳者略歴

日高健一郎(ひだか・けんいちろう)
筑波大学教授(世界遺産専攻)
1948年生まれ。東京大学工学部建築学科卒。同大
学院博士課程で西洋建築史を専攻、イタリア政府
給費留学生としてローマ大学でルネサンス建築史
の研究を行なう。日本学術振興会特別研究員、豊
橋技術科学大学助手、筑波大学講師、助教授を経
て現在に至る。この間、1985-86年に日本学術振興
会特定国派遣研究者としてローマ、アテネでビザ
ンティン建築史を研究。1990年より、文部科学省
科学研究費によりイスタンブールのハギア・ソフ
ィア大聖堂の学術調査を実施。日本イコモス委員
会理事として歴史的建築物の構造と保存・修復に
関する国際指針の作成を推進している。

訳者略歴・分担

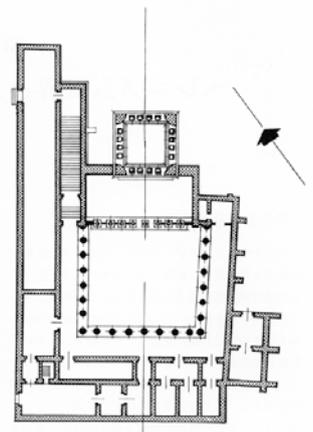
- 河辺泰宏(かわべ・やすひろ)
〔担当:序・13・14・15・16・18章〕
愛知淑徳大学現代社会学部教授(都市環境デ
ザインコース、西洋建築史専攻)
- 上月裕子(こうづき・ひろこ)
〔担当:5・6・7章〕
日本大学講師(西洋美術史)
- 高原健一郎(たかはら・けんいちろう)
〔担当:1・2章〕
有限会社アーキテクトニクス代表(建築家・
ITコンサルタント)
- 土居義岳(どい・よしたけ)
〔担当:3・4・17・19・20・21章〕
九州大学大学院教授(西洋建築史専攻)
- 吉澤京子(よしざわ・きょうこ)
〔担当:8・9章〕
跡見学園女子大学短期大学部
生活芸術科助教授
- 日高健一郎(監訳)
〔担当:謝辞・10・11・12章〕



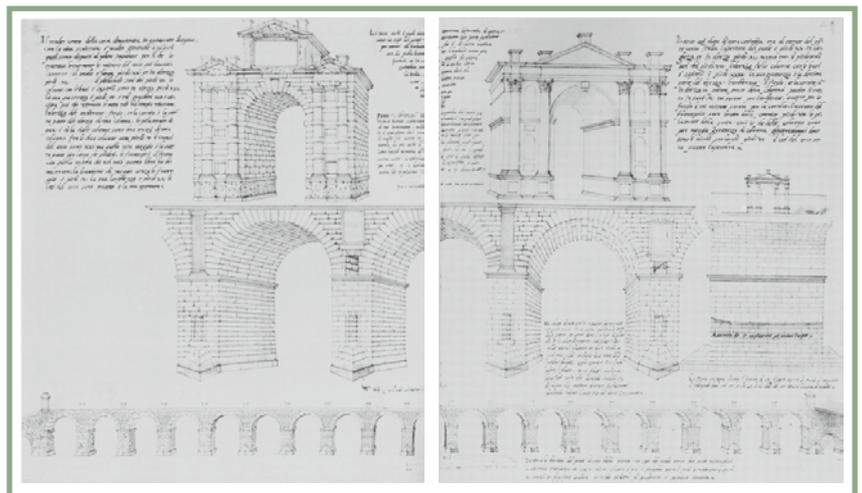
2004年10月刊

A4判 上製箱入
本文 406頁 挿図 203点

定価 39,900円(本体38,000円)
ISBN4-8055-0466-8 C3052



ゼウス・オリュンピア神殿 アテネ 前175年起工



セルリオ「第八書」:ローマ帝国境界の橋、蛮族の側の門(左)とイタリア側の門(右)

お取り扱いは

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7
電話 03 (3561) 5993 FAX 03 (3561) 5834